教育委員会会議の概要（令和８年８月定例会）

◆　日　　時　令和８年８月２４日（月）午後２時００分から午後４時１５分まで

◆　場　　所　教育局　第１会議室

◆　出　席　者

教　育　長	天 野　　元	出席
委員・教育長職務代理者	佐 藤　　淳 一	出席
委　　員	庄 司　　弘 美	出席
委　　員	長谷川　　真里	出席
委　　員	永 富　　良 一	出席
委　　員	松野　　大二郎	出席
委　　員	高 橋　　知 子	出席

◆　会議の概要

１　開　　会

２　議事録の承認　７月定例会

３　議事録署名委員の指名　　高　橋　委　員

４　報　告　事　項

（１）令和８年度全国学力・学習状況調査の結果概要について

（学びの連携推進室長　報告）

資料に基づき報告

佐　藤　委　員　まずは、同時期に行っている仙台市標準学力検査に続いて全国学力・学習状況調査について、良好な結果であり、特に中学校はすばらしい結果が出ているのかなと思う。現場の先生方の授業力改善と向上のたまものだと思うので、しっかり評価してほしい。また、現場の先生の自己肯定感をぜひ上げていただきたい。

何点か気になっているところがあり教えていただければと思う。29 ページの 11 番「特別な配慮が必要な児童生徒への指導」という項目だが、小学校は全て全国平均よりプラスになっている一方で、中学校が軒並みマイナスである。この辺をどう押さえているのかいうことをお聞きしたい。

学びの連携推進室長　中学校が確かに全国と比較してマイナスが目立つところとなっている。中学校でも、特別な配慮を要する生徒に対して、その実態に応じたアドバイスや関わりなどを先生方はしていると考えているが、このような数値を見たときに、配慮の考えを先生方が持ちつつも、なかなか物理的に、あるいはいろいろな進度、授業を進めるとかそうい

った流れの中で、少し難しさを感じているのかなということも想像している。こちらについては、マイナスになっている背景を、特別支援教育課などとも連携しながら、何か支援だったり、情報提供だったりを検討していきたい。

佐　藤　委　員　小中があまりにも現状違っているということで、ぜひ共有していただいて、できれば中学校がなぜこういうふうになっているのか検討いただきたい。

教　　育　　長　これは今年度だけの傾向か。それともずっとこの傾向なのか。

学びの連携推進室長　黒く塗ってある設問については今年度新たに設問項目として出ているところであり、白い部分については昨年度の結果などもお示ししているとおりではあるが、昨年度と比べてよくなっているところと、さらに悪くなっているところと、まちまちなのかなというところである。

教　　育　　長　同一の傾向が見られる項目もあるので、例年同一の項目が同じ傾向が見られるところなんかは、もしかしたら評価の軸というか、誤解を恐れずに言えば相場感というか、そういったものが共有されていない可能性もある。昨年、一昨年、英語の先生の生徒に対する評価について、仙台市の教員の方々がストイックに評価していたところを、様々な手法を使ってその水準というものはこういうことを言うのだよというのを現場にお知らせしたということがある。ここも同一傾向が見られるということであれば、原因が評価のほうの問題なのか、それとも本当に実態としてそういう課題なのかということは、担当課とも詰めていただければと思っている。

学びの連携推進室長　ありがとうございます。

佐　藤　委　員　２点目だが、12 番の小中連携のことなのだが、小中連携については、仙台市は早くから取り組んでいて積極的な実践を積み上げてきていると思うのだが、それでも全国よりも大きく、10 ポイント以上小学校で低い。中学校は若干改善されているが、低い。小中連携というのは、負担感とか、現場の先生方の小中連携をするための時間を生み出せないというような、そんな悩みがあったりしたので、なかなか思うように進まないということもあった。また、学区が複雑だったり、いろいろ原因はあると思うが、今はどういう状況なのか。例えば、働き方改革とも関係し合うのかなと思うが、現状を教えていただきたい。

学びの連携推進室長　小中連携の取組については、活動実績は、年々増加傾向にある。しかし、その内容については、教科に関するものというよりは行事だったり、教科外の部分が多くなっていたりするところである。例えば中総体について、中学生は振替休業日があるが、小学生は平日で学校に登校しているので、そういったところで、体力・運動能力テストの補助を学区内の小学校に行って児童と関わりながらやっている。また、あいさつ運動だとか、地域の行事に関連したようなところで小中連携の取組は年々増えているといったところである。

　しかしながら、教育課程、教科の指導となってくると、授業をどういうふうにしていけばいいのか、といったところの検討会議などの時間が必要だったり、その時間限りではなかなか改善の具体的な方策が見えなかったり、難しいところがある。ただし、授業参観をお互いに行うなどの取組を行っている小中学校もある。

佐　藤　委　員　幼保小連携と小中連携などの縦の連携や、地域連携などの横の連携を重視して、学びの連携推進室が施策を担っているのかなと思うが、全国より低いというのは、少し解せないなと思ってしまう。

　あと、後ほどの報告にもあるが、点検評価の中での指標が全国より低い値で設定さ

れている。小中連携の教育効果というのはあるわけで、その辺をこれからどうやっていくのか。今はこういう現状だとして、これからどう展開していくかというのは、見通しを持たれたほうがいいかなというふうに感じた。

始まってから 20 年弱のこの検査でも、小中の傾向というのはずっと同じような状況が続いている。小学校は大体全国と同じぐらい、中学校は全国をかなりリードしている形の結果が出ているということで、昨年度も話題になったかもしれないが、この傾向というのは、どういう要因によるものと考えているのか。平成の時代だと、震災後は小学生の自己肯定感が下がったのだが、「自分にはよいところがある」に対する、全国平均より下がっていて、それは今はもう全国平均を超えているという状況。それから小学生が落ち着かない、中学校のほうが落ち着いている。これは今の学校質問紙の傾向でも、中学校のほうが落ち着いていると出ている。小学校はまあまあだが、小学校はかつてもう少し低かった。そういうことも要因の一つかなぐらいである。結局これじゃないかというのが明確には浮かび上がらなかったという。いろいろな要因が複雑に絡み合っているので、そう単純にこれだというふうに出てこないと思う。通塾率がどうのこうのとか、あとはいろいろあったのだが、現状だと、どう考えているのか。単純に考えれば、小学校がもう少し底上げできれば、中学校はさらによくなるのかなと考えたりとか、いろいろ単純に考えるとそうなる。あと、仙台市標準学力検査は、今年、小学校も中学校もどちらもマイナス５ポイント以下、未満がなかったという、非常に良好な結果だということを考えると、今後それがこれにも反映していくと読んでいるのか。その辺のことも踏まえて、現状で、これをどう押さえているかというのをもし教えていただければと思う。

学びの連携推進室長　中学校の結果と比べると、小学校のほうは、それに合っているような全国比ではない。それはそのとおりだとは思うが、単純に小学校だけで全国比としたときに、プラス・マイナス・ゼロ、プラス１といったところで、まず全国と同等といったところでは見ている。しかしながら、中学校がさらにプラス３、プラス４といったところとなるところを見ると、同じ仙台市の児童生徒と考えたときに、もう少し上回れるのかなという可能性も考えられると思っている。そうしたときに、確かな学力研修委員会等での分析を基に、課題の見られる領域内容について、地道ではあるが、その指導改善に取り組んでいくというところで、全国比を行ったときにさらに上回るような結果を目指していければなというふうには思っている。

また、中学校段階になると、勉強する目的、学ぶ目的といったものが小学校６年生よりさらに、自分の進路などもいろいろ考える時期でもあって、自発的に、あるいは主体的に授業に臨んで、家庭学習のところなども、また力も入る段階であるのかなと思う。それもまた小学校での指導を土台にして、自分づくり教育の部分だとか学ぶ目的などを段階的に体験させたり考えさせたりする経験を通して中学校で大きく開花しているというか、そういったことなども結果として中学校のほうがより上回っている要因なのかなと考えている。

佐　藤　委　員　恐らく結論がすぐ出るとかという問題ではないと思うのだが、ずっと同じ傾向なので、それが実態だといえば実態なのだと思うが、中学校がぐんと伸びる、もし何か原因が分かれば、それは小学校に還元できるし、しっかり分析するというのがすごく大事なのかなと思っている。当時も、そういう原因を探った。例えば、同じ政令市同士の結果でどうなのか。大体小中というのは同じ傾向が出ることが多いのだが、例えば

新潟なんかは、当時は小学校がよくて中学校が悪いという結果が出た。そうすると、もう新潟あたりは仙台に視察に来たりして仙台の情報を収集しようとかしていた。そういうことを踏まえると、同じような傾向、例えば仙台が特異なのか、さっきの自分づくりの教育が反映していて、学びへの関心が上がってという、将来に向けて学習意欲が高まるという、仙台はそれが効果的に表れているのか、それともそういう傾向の都市が他都市にあって、例えばそこには何か要因があるのかとか、その分析も、例年とは違うプラスアルファというか継続してやっていってほしいなというふうに思う。

教　育　長　私のほうからも少しコメントすると、去年も同じ話をしたが、10 ページと 11 ページを見ると、一つの仮説として、国語については、中学校になって成績、全体的には底上げしているのだが、中位層が少し増えてくるような傾向が見られる。ただ、仙台市は、下位層のＤ層と呼ばれる部分についても、減らしている。算数のほうは、これは中位層が増えているというよりは、下位層と上位層が増えて全体が底上げされている。佐藤委員からもお話があったように、追跡調査ではないので、この瞬間の小学校６年生と中学校３年生ということになるので、何とも言えないのだが、仙台市の場合、中学校の数学でいくと、下位層のこどもたちに対する小学校から中学校に上がるときの手当てが、算数サポーター、数学サポーターなどによってしっかり行われているので、下位層、下の層のこどもたちへの手当てがうまくいっているという仮説は一つできるかもしれないというふうなことは言える。ただ、今お話ししたように、追跡調査という、同一のこどもたちを追跡、同一学年を追跡していった話ではないので、今この瞬間の現象ということではある。そうした点においては、平均値を上げる戦略、戦術はいろいろ手法があると思うのだが、一つは下位層に着目して学力下位のこどもたちに手当てを強くするのか、それとも上位のこどもたちをさらに伸ばすのかとか、中位のこどもたちをさらに伸ばすのかとか、様々そこではあるのだろうというふうなことである。

永　富　委　員　今の議論にも関わることなのだが、私のほうでも気になるのは、例えば今の小学校、中学校の分布を見たとして、まず下位層に着目するのだが、どういうことが要因になっているか。一つ可能性として、17ページ、16ページ、各教科の質問があるが、「授業がよく分かりますか」とか、「勉強は特に好きですか」。いろんな教科嫌いが大きく話題になっているところであるが、全国平均との比較は相対的な値なのだが、実数としてやっぱり６割に達していない。ということは、４割はあまり好きじゃないということになる。そうすると、その好きな子と、そうじゃない子で、例えばこの分布に違いがあるのかといったような分析は可能だと思う。だとすると、一つ戦略として、なぜ好きになれないのか。先ほど主体的な学びというのがあったが、やっぱりその学ぶ理由が腑に落ちれば学びたくなるとは思うのだが、そういうところの手当てができているのかどうかという検証をやらないと、多分いつまでたっても同じようになってくると思うが、いかがか。

学びの連携推進室長　こちらの学習意欲というか、それぞれの教科に対する好き嫌いというものについては、小中学校段階の児童生徒だと大きく学力の点数自体にも反映する部分かなというふうに考えたときに、やはり本当に６割いっていないといったような状況については、100は人間なので好き嫌いもどうしてもあるので難しいとは思うが、もう少し高くなればなといったところの数値かなというふうに思う。その数値を上げるために、今委員がおっしゃったとおり、教科ならではの知識だとか、技能の部分の面白み、あるい

は何でそういう知識が生まれたか、あるいは必要なのか、どういったところに生かせるのか、社会の中でどんなところに使われているのかなど、そういった深い学びの部分の質の部分で、さらに授業づくりを頑張って、先生方は十分忙しい中頑張っているところではあるが、そういったところを研修の機会などに、お互いに勉強し合って、さらにいい授業づくりといったものができるように、教育委員会のほうでも情報提供や改善案のところで、参考になるような情報といったものについて考えていかなければならないなと思う結果だなというふうに捉えている。

永　富　委　員　今、その改善策云々以前に、例えば17ページの63に行くと、「将来役立つ」と例えば小学校だと９割ぐらいは思っているわけで、中学校でも７割５分以上いっているわけである。ところが、やっぱりあまり好きじゃないということがあって、これがデータとして、こちらの前半のほうに出てきている学力と、正答率とどう関連があるかというクロス集計みたいなことはできると思うのだが、そういうことはやられていないのか。要は、そういうデータがあれば、どこに重点が置かれるのかということが決まってくるのだと思う。

学びの連携推進室長　そういうクロス集計については、まとめる方法があって、そういったところを分析して改善に生かしていければというふうに思う。

永　富　委　員　おかげさまで私も２年目で、いろいろ昨年も同じようなデータを見て、あまり変わっていないなという印象を持っているのだが、そういう分析が出て、それに基づいて先生たちがどこに重点を置くのかと自分で感じていただけるのがすごく大事なのかなというふうに思った。もし何かそういう情報があるのであれば、ぜひ開示していただければと思っている。

学びの連携推進室長　これからということになり申し訳ないが、そのようにしたいと思う。

永　富　委　員　もう一つ、２点目なのだが、確かに全国平均を上回ればそれぞれの項目に応じて皆さんのいろいろな努力が反映されているかなというふうに思うのだが、これは相対的な評価で、一方絶対的な評価で、先ほど取り上げた項目も幾つかあるわけだが、やっぱり指標が設定されて、それに対して全国平均との差はどうあれ、例えばそれが６割ぐらいしか満たされていないといったときに、それの要因を考えることは必要かなと思う。その場合、教育長からもご指摘あったように、指標自体の問題かもしれない。それを聞くこと自体の問題。ただし、その指標がつくられたからにはそれを知りたい目的があるわけだから、高いところに注目するのはいいのだが、そうじゃなく、例えば５割、６割、あるいは４割ぐらいしかいかない項目に対して、なぜそうなっているのかということと、それに対する対策みたいなことを、学習の成果という正答率みたいな一つのアウトカムというか結果があるわけだから、それと対応させて、改善するにはどこが重要かというのは、それを見ていただければと思うのだが、現時点で絶対的な評価で低いところに関して、気になされているところがあるのか、あるいは何か取り組もうと思われていることがあるのか、もしあったら教えていただければと思う。

学びの連携推進室長　例えば国語でいうと、今回、漢字を書くことが短答形式のもので全国より低いなどの結果が出ているが、基本的な漢字が書けないというところには、それはそれで一般常識、教養を身につける段階であって、そこは問題視しないといけないなとは思っている。書くことだとか、文章の要旨、あらすじ、どんな内容がどういう順番で、構成で書かれているかだとか、そういったところについては、これからの時代を生きていくこどもたちは、相手が言っていること、あるいは何か情報を正確に捉えるといった

能力が今までよりも一層求められているのかなと考えたときに、そこは全国平均よりは上回っているが、やはり５割いっていないだとか、そういったところについては、とても大切な力であると思う。確かな学力研修委員会、市の標準学力検査を基にしながら改善案などを検討し、また発信するのは委員会だが、そういったあらすじを捉え、そして書き表すだとか、そういったところについては、授業の中できちんと力をつけていけるような指導方法の提案といったものについては例年行っている。そこがしっかり伸びていっているかどうかといった部分については、毎年同じような課題に対してどういう指導をしていけばいいのかを提案している。決して胸を張れるものではないのかもしれないが、全国平均を下回っているものだけを見ているというよりは、上回っていてもやはり大事な力といったものについてはしっかり捉えて指導の改善案などを教育委員会としては周知発信していきたいと考えている。

教　　育　　長　どちらかというと今、学校質問調査のほうをお話しされたのだと思うので、学力というよりは、教師がどういう指導をしているのか、それが全国平均よりも下回る、上回るではなく、そもそも５割の先生しかこう思っていないので、というようなところにどこか気になるところがあるかという。

学びの連携推進室長　申し訳ございません。

永　富　委　員　いや、この両方を合わせると見えてくることがあるのではないかということで、見えてきたことに対して何か考え出せることがあればという質問だった。

もう一つだけよろしいか。いわゆるスマートフォン等の利用に関して、何となく、時間が多いとよくないというイメージで質問が設定されていて、一方で、学習で使う、うまく使っていればいいよねというような意図で質問が設定されていると思うのだが、ここは、今は流動的なところで、多分独自項目で幾つかの質問が設定されているのだが、これは今後ますます課題になってくると思うので、ある一定、一概的にも、情報端末なので、特に探究学習みたいなことが行われてくれば、いろいろな利用が高まるので構わない。ただし、むしろそういう情報の解釈が、先ほどおっしゃっていたシナリオ的な物語というかコンテクスト、文脈みたいなことを大事にするのが教育としては大事になってくると思うのだが、ここの、これをそう簡単に変えるのはよくないことだが、この情報の取扱い方、場合によっては一人歩きする、長く使っているから単に悪いのだということじゃない。そういうところに関して、もし何か議論があれば、今回データが出ていないＩＣＴの機器の活用等の項目についての質問、今私が質問したみたいなことをどう考えているのか教えていただけるか。

学びの連携推進室長　ＩＣＴ機器について、授業での活用というのは、仙台市については全国を上回っているような状況かなというふうに思う。東北大学との連携による科学的な学習意欲に関わるプロジェクトの結果でも出ているとおりではあるのだが、全く使わない子よりは、やはり１時間程度使う子のほうが学力との関係性を見たときに高い傾向があるといったところもあるし、今のこどもたちはもちろんＩＣＴ機器を適切に活用して、何か自分が追求・探究したいところ、あるいは解決したいところなどを行っていくといったところを見たときに、やはり効果的な活用方法、活用しながら問題を解決していくといった力を授業等で意識して指導できればなというふうに思っている。

永　富　委　員　本学が関わっているのでよく分かるのだが、ただ、あの調査というのは横断調査なので、実際に例えばスマートフォンを使っている時間が、例えば今１時間だったら学力がいいと分かっているが、じゃその後どうなっていくかということは分からない。

もし可能であれば、例えば３年間在籍している間でもいいのだが、そういった追跡調査をやっていくことによって、そもそもその利用時間が変化するかということ、それから利用時間の多い少ないによってその後はどうなっていくかということを追跡できるような、データがあるわけだから、そういう分析をするに当たって、もしかしたら保護者の同意も得なければいけないが、そういうことをやることによって、本当にどういうやり方が適切なのか。多分、ある程度の標準は分かって、もちろんそれから外れたから駄目だということにならないと思うのだが、その意義の、意味のある、皆さんにアドバイスできる、あるいは皆さんにこうだよということで言えるような情報になっていくと思うので、ぜひそういうアプローチもしていただければと思っている。

学びの連携推進室長　ありがとうございます。

松　野　委　員　小６のときのデータと中３のデータを、それこそ今の中３の子たちを調べるときに、この子たちが小６のデータと比べると、もっと分かりやすくなるのかなと思った。

学びの連携推進室長　経年追跡したような状況で確かに示せれば、成長だとか課題が明確になるので、そのようにできればいいのかなとも思うが、公表しているものについては、そうはなっていないといったところである。内部のほうでは、追跡のほうは行っている。

教　　育　　長　ちなみに、学校の現場で、この資料を、この調査結果をどのように活用しているのかということについて、皆さんに回答していただければと思う。学校現場で、クラスの経営とか、または個別の指導に、この結果をどのように活用しているかという意味で開示していただければ。

学びの連携推進室長　確かな学力研修委員会で、その結果の変化を基にしながら、こういった部分には良好な結果が見られているだとか、引き続き課題が見られているだとか、そういったところで、改善方策とともに学校には示して、参考にしてもらえるようには確認しているところである。

教　　育　　長　クラスの中のこどもたちに対する個別の指導のときも、仙台市の標準学力検査を使っているかと思う。全市的に見たところの位置づけとか、それから６年からこうなっているよねとかいうことも指導には使っているということか。

学びの連携推進室長　仙台市標準学力検査、それからこの全国の学習状況調査についても、前年度までの学力を測っているので、今年度受け持っている生徒たちがどういった課題をこれまで持っているのかといったところは先生方も押さえながら、その課題の部分については、丁寧な指導を心がけたり、あるいは補助的に何か課題のプリントを作ったりなどの対応をしている、というところである。

教　　育　　長　三者面談のときも使っているかと思うが。

学びの連携推進室長　三者面談のときにも一人一人にこういったところで、良いところと、あと頑張るところといったところを保護者の方と一緒に共有、アドバイスなどする機会がある。

高　橋　委　員　学力以外のところで、13ページの質問にあるのだが、「困りごとや不安がある時に、先生や学校にいる大人にいつでも相談できますか」というような質問がある。決して高い数値ではないと思うのだが、例えばこういう質問に対しての数字を受けて、学校の中、例えば先生方との振り返りみたいなものとか、全体的に小学校、中学校で、こういった質問に対してはこうしていこうみたいなところというのはあるのか。

学びの連携推進室長　やはり家族ほどではないにしても、かなりの時間こどもたちのそばにいる教員にとっては、何か困ったことなどあるときには相談に応じたり、何か助けられればなといったところではいる。全国よりは少し良いとはいえ、そうでもないといったような傾

向が、例えば、何かしらの節目節目、学期の始まりだとか、何かの行事だとか、四六時中ではないのだが、学校のほうで生活アンケートみたいなものもやっているので、そういったピンポイントのタイミングを捉えて、何か困ったことがあれば、不安などがあれば、どの先生でもいいから話をしてねだとか、あるいは話ができなくても、アンケートがあるので、何でもいいから気になることがあれば書いてねなどの声がけというものはしているところ。もう少し数値的に上になればいいのかなと思った。

教　育　長　これは国の調査だから、どうしようもない設問なのだが、こどもたちにとっては、イエスと答えたほうがいいというのが分かっていてというような設問なので、多分上振れしているはずである。上振れしているにもかかわらず、２割から３割のこどもたちが相談できないというところが課題で、実際はもっと相談できない可能性が高いというふうに捉えたほうがいい話なのだと思う。設問自体がもう直せないのでどうしようもないのだが、それから先ほど永富委員のほうからも話があったような話も、ほとんどがこれも教育社会学的な社会階層の話とかが全く抜かれている調査なので、それを学力とそのまま単純に結びつけられるかというところが実は課題であって、スマートフォンを１時間にしているのは、一体それはこどもの努力でそうなっているのか、家庭の努力でそうなっているのか、そういう話も出てくる。だから、この設問及び設計、そして学校の先生の主観で答えさせている部分もあるという点など、様々分析するに当たって障害があるなというふうな、率直な感想だが。

長谷川委員　教育社会学的な観点や日本文化の影響などが回答に影響を与えるのは、非常にあると思う。個別に見ていくと切りがないのだが、例えば、今話題に出た 13 番の「先生や学校にいる大人にいつでも相談できますか」と学校の中の大人にピンポイントに絞って相談できるかと聞いている場合、これは文化的な信念が非常に強く作用していて、国際比較研究のいじめ研究では、日本の児童生徒は、先生をとても信頼していて、とても好きである、この割合はとても高いのだが、相談する相手として先生を選ばない傾向にある。これは先生を嫌っているとか信頼していないのではなく、相談は仲間うちで行うべきだとか、せめて家庭でという信念の強いことが影響しているようである。もう決まった設問の場合は、項目数が増えるのはよろしくないかもしれないが、近隣や家庭やどこかに相談ができる場がありますかというように、学校に絞らず、相談できる人が周りにいますかというような質問を例えばどこかで出すなどして、そこでも低かった場合は、困っているこどもがたくさんいると考えてもいいのかもしれない。なので、教育長がおっしゃったように、聞き方によって反応が変わることは当然あると思うので総合的に見ていくことが必要かなと思う。

永富委員　少しかぶるのだが、同じ13ページのほうの20という新規の項目で、「人と違う意見を言っても否定されないと思いますか」で、回答が７割ということは、ある意味30％以上が、中学校だが、否定されると思っているわけである。多分これも上振れしているはずである。ただ、これというのは非常に大事な項目で、私たち大学生、大学院生になって、自由に物を意見する、意見交換をして、対立的な意見があっても全然構わないのだが、そこからどう考えるのかというふうになって、これ実は探究学習とも大きく関係してくるところなのだが、これがこれだけの割合というのは物すごく気になる。こういうことについて、何かそういう議論にはならないのか。

学びの連携推進室長　20番の項目については、教育局のほうでも、この結果について会議をした折に、委員の方々にご意見をいただいたということがあった。確かに安心してその子らしく生

活するに当たっては、言いたいことが言い合えるだとか、そういったところというものは、学級経営している先生たちが望んでいるところだし、こどもたちもそういったクラス、学校で生活したいと思っていると思われるので、こういったところの改善について考えていきたいと思っている。

永　富　委　員　多分両面あって、人間関係のこともあるし、一方で、実際に今後、いわゆる未解決の課題に対してどう取り組んでいくかというときにも、一つの意見だけに集約するとそれで解決できないことがあるので、もちろん多数決とかそういうことは大事ではあるが、少数意見も大切である。

学びの連携推進室長　ありがとうございます。

佐　藤　委　員　先ほど委員さんからあった質問で、学校でどうこれを反映しているのかということだったと思うが、恐らく想像なのだが、学校にも全て同じデータが、学校のデータとして持っていて、仙台市、全国と全部比較できていて、そして、それに対して極端に落ちているとかというところは大きな課題であって、職員で共有をして、そして課題改善のために方策をやっぱり打ち出す。保護者へのアカウンタビリティーもあるので、きちんと落ちているところは公表するとかというのをやられているのだと思う。もちろん点数だけではなくて、そういう細やかな分析も学校ごとにやって、学校も改善点を出して、ＰＤＣＡサイクルに乗せていくというやり方で、各学校が学力向上のサイクルにうまく乗せていくというやり方をしているのだと思う。だから、全く同じ項目で下りていっているので、学校は顕著に分かると思う。

教　　育　　長　個別の生徒指導だけじゃなくて、コミュニティ・スクールでも、これの情報を開示している学校もあるのではないか。

学びの連携推進室長　はい。学校運営協議会で、市の学力調査・生活学習状況調査も、全国学テについても同様に、保護者には全員にこの結果と分析、改善方策とともに保護者全員に発信している。地域の代表の方々のコミュニティ・スクール、学校運営協議会でも、この結果については共有され、地域として、あるいは学校運営でこういったところを地域と協力しながら、どうすればいいのか、というような、熟議と言っているが、議論で話し合ったりしている学校もある。

佐　藤　委　員　質問紙項目で、全国学テでやっていて、先ほど長谷川委員さんからあったように、例えばこういう質問もあると補完的でいいというのがあった場合は、標準学テで聞き取るということもできる。全国だけでは足りないのだったら、標準学テで補完する形で、さらに質問するといいのではないかと思う。

庄　司　委　員　質問のところの新規のところで、６番の中のところの「学校の勉強について家庭で話しますか」と７番、「学校での悩みについて、親とか家族でどれぐらい話しますか」というところで、回答が、④が「年に１～２回」、⑤は「ほとんど、または、全くない」。④⑤はほぼ同じぐらい。数字を見ると、特に学校での悩みについてというところが④⑤を足すと結構な割合なので、これはもう別に、全く悩みがないから、これぐらいあるからいいというふうに思っていいのか、全く会話がないというところを重視して会話がないのはよくないなと、どちらのほうに捉えられるのか。

学びの連携推進室長　私も同様に、どう捉えればいいのかなと。①が高ければ高いほどいいとは思えないというか、親、家族に言わざるを得ないような毎日というのもどうかなというふうに思っている。ただ、こどもの段階なので、当然悩みだとか困ったことというものはあると思う。また、そのトラブルに向き合う、年がら年中ではないと思うのだが、そう

いった大きな何かトラブルが目の前にやってきたときに、ほぼ毎日それで頭をいっぱいにしているのかなと想像したりもするが、平均的に１年を考えたときに、大体は③、④の月に１～２回、あるいは年に１～２回といったものが身近な親、家族に話を悩みについてはしているといったところ。こちらについては、安心という言い方ではないかもしれないが、そこまで心配をしなくても、多くのこどもはこういった頻度というか、そういった状況、③、④のような状況というふうに捉えるのはあながち外れでもないなというふうに思っている。

教　　育　　長　この設問を見たときに、設問のまた少し批判になるのだが、誰のことを言っているのかよく分からない。自分が親に話しているのか、親、こどもにとっての親の評価なのかがよく分からない。あなたは家族に話しますかということなのか、あなたの家族はあなたの話をどれくらい聞いてあげていますかということなのかが分からない。

松　野　委　員　少し確認なのだが、さっき確かに運営協議会でもお話ししたような気がしたのだが、児童生徒の個別のものを各学校で一人一人の管理をされていると。小６から中１に上がったときの持ち上がりのデータというのは、引き継いでいるのか。

学びの連携推進室長　学校間では引き継がれてはいない。

松　野　委　員　例えば１年生になって、ちょっと学校に来られなくなった子がいたりとか、その場合、あとはいじめの対象になってしまったときに、例えば家庭では、小学校のときどうだったのという、不登校に関しては行きづらいとか、来られていないよというデータは、多分中学校のほうで引き継ぐと思うのだが、実際、質問調査一覧の国語とか教科の部分だけじゃなく、むしろこっちの自分の自己肯定につながる部分だったりというのは、何か引き継いでいったほうが学校運営する側としても少し見直すところがあったりできるのかなと思っての質問だった。

学びの連携推進室長　データとしては持ち上げるということはないのだが、ただその年、小学校６年生が来年度は中学校に入ってくるというところは分かるので、小中間でその結果を共有する。ただ、個人が共有されないといったところはあるので、そこの個人がなかなか問題だなとは思いつつも、言葉で何かあるか聞いていくという感じになるのかなと思う。

教　　育　　長　小学校、同じ校種の中であれば、学年間の共有はされているが、校種が違うと共有されなくなるということか。

学びの連携推進室長　入学するこどもたちの一人一人のデータは持ち上がらない。

教　　育　　長　学年間では共有しているか。

学びの連携推進室長　学校の中では共有されて、そこは可能である。

教　　育　　長　引き続きそこは研究してみたい。

５　付　議　事　項

第 18 号議案　令和７年度の教育に関する事務の管理及び執行の状況の点検及び評価について

（総務課長　説明）

資料に基づき説明

原案のとおり決定

第 19 号議案　令和９年度仙台市立鶴谷特別支援学校高等部入学者選考方針について

（特別支援教育課長　説明）

資料に基づき説明

原案のとおり決定

第 20 号議案　市議会の議決を経るべき事案に係る市長への意見の申出について
（秘密会）
１．令和７年度決算の認定について

（総務課長　説明）

資料に基づき説明

原案のとおり決定

２．「仙台国際探究ラボ条例」の制定について

（国際教育推進課長　説明）

資料に基づき説明

原案のとおり決定

３．工事請負契約の締結に関する件
（１）仙台市七北田保育所・仙台市教育支援センター複合化増改築工事
（２）仙台市立八幡小学校校舎等増改築工事
（３）仙台市立八幡小学校校舎等増改築機械設備工事
（４）仙台市立福室小学校校舎等増改築工事
（５）仙台市立福室小学校屋内運動場増改築工事
（６）仙台市立北仙台小学校校舎等増改築工事
（７）仙台市立長町小学校校舎等改築工事
（８）仙台市立長町小学校校舎等改築電気設備工事
（９）仙台市立八木山南小学校校舎及び屋内運動場長寿命化改修工事
（10）仙台市立中野中学校校舎等長寿命化改修工事

（多様な学び支援課長、学校施設課長　説明）

資料に基づき説明

原案のとおり決定

６　閉　　会